

【学 年】特別支援学級	【教科・単元名など】 生活単元・音楽科「おながくをたのしもう」「コンサートをひらこう」
【実践内容】 ＜指導者の願い＞ 1、活動に興味を持って、楽しく活動して欲しい。 2、一人一人の得意とすることを生かして表現して欲しい。 3、一人一人に合ったコミュニケーションの取り方を獲得して欲しい。 4、コミュニケーションを楽しんでほしい。(ひびき合い) ＜学習の流れと内容＞ 1 高校生和太鼓部の演奏を聞く。 和太鼓をたたく体験をさせてもらう。 基本のリズムを教えてもらう。 土日に高校生と一緒に練習をする。 2 音楽科や生活単元の時間に練習をする。 3 コンサートに向けての準備をする。 4 コンサートを開く。 5 コンサートの振り返りをする。 1、2について 子どもたちは、リズムに乗って体を動かすことが好きである。和太鼓を演奏するということは、自分自身がリズムを作り出すことであり、表現を楽しむことができる。また、和太鼓の響きは振動として直接体に伝わってくることも子どもたちの関心を引き出すことにつながる。 高校生の協力もあり、定期的に高校生と練習をすることができた。 1の継続について 子どもたちの集中力や、興味関心を向けていられる時間はとても短いし、一人一人の継続できる時間も違う。何をやっているのかが分からないことや、うまくいかないことが継続できる時間を短くしてしまう。そこで、視覚支援が必要となってくる。記憶を留めることが苦手な子どもたちであるため、リズムを細かく切って短冊にし、リズムごとに色分けをして書いたものを、めくりプロのようにして提示した。 全員が完璧にというのではなく、一人一人に合ったねらいを設定し、無理の無いように学習を進めた。 3、4について 11人での話し合い活動を通して、伝えることの楽しさを感じることや、新しい考え方を知ることができるようにして来た。 ・コンサートを開いてみんなに見せたい。 ・「がんばるアロハ マハロ コンサート」という名前は、子どもたちの話し合いから生まれたものである。また、練習の必要性や、看板、飾り付け、衣装・招待状作りなども、話し合いをしたことで、子どもたち自身が考え出したことである。	
【反省】 この学習を通して、最後まで興味を持って楽しく活動をする子どもたちの姿を見ることができた。活動の内容（和太鼓演奏等）が子どもたちに合っていたことがその要因の一つであると思われる。 他の要因として、一人一人に合った支援ができたことも挙げられる。「何をしているのか・どうやるのか」が分かるような支援を心がけた。 3 クラス合同での話し合いの場を多く設定してきたことで、話し合いができるようになってきた。話し合いと言っても、友だちが言うのを真似るだけの子どももいる。その場において、何かしら反応をし、一緒に参加していることを楽しんでいる姿も見られた。また、話し合いの中心になることができ、自分の意見が取り入れられた喜びを感じることができた子もいる。生き生きと発言することができ、学習への意欲をどんどん高めていくことができた子どももいる。 適切なねらいの設定や支援計画のためにも、的確な見取や見極めの重要性をあらためて感じることもできた。	